

泌尿器科

岡 聖次

平成 23 年（平成 23 年 1 月 1 日～12 月 31 日）の入院患者総数 570 名（重複入院を含む）のうち 382 名（67.0%）は癌と診断された患者であり、その内訳は腎癌 43 名、腎盂・尿管癌 14 名、膀胱癌 183 名、前立腺癌 130 名、精巣腫瘍 1 名、その他 11 名である。

当科では、診療においては「十分なインフォームド・コンセントを行った上で、EBM に基づいた診療を行うこと」をモットーにし、癌患者に対しても全例「がん告知」を行い、病状や治療方針等について時間をかけて十分な説明を行っている。また不幸にして癌の進行により疼痛で苦しむことが予想される患者に対しては、早期の段階から院内の緩和医療チームに協力を依頼し、可及的に苦痛を取り除くことを心がけている。

平成 23 年 5 月には腎、副腎、および前立腺に対し腹腔鏡下小切開手術の施設認定を得たことにより、手術的治療においては「手術は小さな創で」をモットーにし、腎癌や腎盂・尿管癌に対する腎摘除術は腹腔鏡下手術（ラパロ）か 6-7cm の皮膚切開で行う腹腔鏡下小切開手術のどちらかで、腎部分摘除術は 4-7cm の皮膚切開で行う腹腔鏡下小切開手術を、前立腺癌に対する前立腺全摘除術は 6cm の腹腔鏡下小切開手術を行っている。良性の副腎腫瘍に対する副腎摘除術は腹腔鏡下手術を原則としている。

限局性前立腺癌患者に対しては、当科では手術のみを勧めるのではなく、年齢や ADL、病状などを鑑みて、放射線療法（組織内、体外照射）あるいはその他の治療法も提示し、最終選択は患者側に委ねている。その結果、当科では毎年放射線治療患者数（内照射+外照射）が手術患者数を上回っているのが特徴である。

尿路結石（腎結石、尿管結石、膀胱結石）症患者に対しては、症例に応じてリソトリプターS（ドルニエ社）を用いた ESWL 治療や経皮的腎碎石術（PNL）、経尿道的尿管碎石術（TUL）や経尿道的膀胱碎石術などを行っている。また、尿路結石症の診療においては、従来同様に再発予防にも心がけ、再発原因の一つとして重要な原発性副甲状腺機能亢進症の発見にも力を注ぎ、副甲状腺の手術も行っている。

去勢抵抗性前立腺癌に対してはドセタキセル治療を治療導入時は入院下で行っているが、2 コース目以降はほとんどが外来化学療法室で治療を行っている。

進行性腎細胞癌に対しては分子標的薬を中心に次々と新薬が開発され本邦でも保険収載されているが、われわれはこれらの治療も症例を選びながら積極的に取り組んでいる。

外来診療においては、癌診療を中心とした急性期病院であるという当院の機能的役割に準じ、慢性疾患で薬剤投与が中心となっている患者に対しては、可能な限り紹介元での診療を依頼するなどして、病診連携の強化に努めている。

【2011 年度研究発表業績】

A-0

Kawashima A, Takayama H, Arai Y, Tanigawa G, Nin M, Kajikawa J, Imazu T, Kinoshita T, Yasunaga Y, Inoue H, Nishimura K, Takada S, Nishimura K, Tsujimura A, and Nonomura N, and the Osaka Renal cell Carcinoma Clinical Study Collaboration. One-month relative dose intensity of not less than 50% predicts favourable progression-free survival in sorafenib therapy for advanced renal cell carcinoma in Japanese patients. Eur J Can. 2011;47(10): 1521-1526 (2011 年 6 月)

Tanigawa G, Kawashima A, Yamaguchi S, Nishimura K, Miyoshi S, Kajikawa J, Neguro N, Yoshioka T, Oka T, Hara T, Takayama H, Nonomura N and the Osaka Renal Cell Carcinoma Clinical Study Collaboration. Clinical outcome and prognostic factors of sorafenib in Japanese patients with advanced renal cell carcinoma in general clinical practice. Jpn J Clin Oncol, 2011 ; 41(11): 1265-1270 (2011年9月)

A-3

小林正雄、木内利郎、木下竜弥、植田知博、井上 均、高田 剛、原 恒男：担癌患者に発生した気腫性膀胱炎の1例「泌尿紀要」57(6) : P.323-325 (2011年6月)

小林正雄、木内利郎、木下竜弥、植田知博、井上 均、高田 剛、原 恒男、波多野浩士、山口誓司：肝動注化学療法が奏効した腎盂癌肝転移の1例「泌尿紀要」57(11) : P.627-631 (2011年11月)

B-4

谷川 剛、河嶋厚成、新井康之、任 幹夫、梶川次郎、今津哲央、木下竜弥、安永 豊、高田晋吾、井上 均、西村憲二、室崎伸和、野々村祝夫：根治切除不能又は転移性腎細胞癌に対するソラフェニブ治療成績～多施設共同研究159例における解析～。第99回日本泌尿器科学会総会、名古屋、2011年4月

河嶋厚成、中山雅志、氏家 剛、谷川 剛、武田 健、嘉元章人、山口唯一郎、小野 豊、高田 剛、中井康友、高山仁志、西村和郎、野々村祝夫：原発性上部尿路腫瘍pT3N0/xM0に対する術後補助化学療法は予後を改善しうる～多施設症例集積の解析～。第99回日本泌尿器科学会総会、名古屋、2011年4月

河嶋厚成、西村和郎、山口誓司、三好 進、梶川次郎、目黒則男、吉岡俊昭、岡 聖次、松宮清美、原 恒男、西村憲二、本田正人、野々村祝夫：2ndラインとしてのSorafenib投与における1ヶ月Relative Dose IntensityはProgression Free Survivalの予後規定因子となる。第99回日本泌尿器科学会総会、名古屋、2011年4月

安永 豊、王 聡、宮後直樹、小森和彦、原田泰規、岡 聖次：浸潤性尿路上皮癌に対するGC療法の使用経験。第99回日本泌尿器科学会総会、名古屋、2011年4月

嘉元章人、米田 傑、木下竜弥、真殿佳吾、森 直樹、関井謙一郎、吉岡俊昭、板谷宏彬、高橋 哲：尿路結石におけるDual Energy Imagingの臨床的有用性。第99回日本泌尿器科学会総会、名古屋、2011年4月

河嶋厚成、高山仁志、谷川 剛、新井康之、任 幹夫、梶川次郎、今津哲央、木下竜弥、安永 豊、高田晋吾、井上 均、西村憲二、中井康友、辻村 晃、野々村祝夫：腎細胞癌に対

するソラフェニブ必要投与量の検討～Relative Dose Intensity を用いて～。第 49 回日本癌治療学会、名古屋。2011 年 10 月

中井康友、嘉元章人、花房隆範、新井浩樹、岡 大三、鄭 則秀、小野 豊、井上 均、古賀 実、西村憲二、安永 豊、細木 茂、西村和郎、目黒則男、野々村祝夫：去勢抵抗性前立腺癌に対するドセタキセルの分割投与は標準用量と同等の効果を有する。第 49 回日本癌治療学会、名古屋。2011 年 10 月

B-6

王 聡、宮後直樹、小森和彦、原田泰規、安永 豊、岡 聖次、児玉良典：腎小細胞癌の 1 例。第 215 回日本泌尿器科学会関西地方会、京都、2011 年 5 月

王 聡、木下竜弥、山口唯一郎、原田泰規、安永 豊、岡 聖次、児玉良典：陰茎皮下 epidermal cyst の 1 例。第 216 回日本泌尿器科学会関西地方会、大阪、2011 年 9 月

安永 豊、王 聡、木下竜弥、山口唯一郎、原田泰規、岡 聖次：新 TNM 分類を検証する一当院腎癌 340 例の検討—。第 63 回日本泌尿器科学会西日本総会、久留米、2011 年 10 月

B-9

岡 聖次：ABC ラジオ「健やかライフ」：「前立腺がん」。2012 年 3 月収録